

介護福祉士養成課程と歴史学習 —— 「身近なお年寄りに話を聞く」 試みを中心に ——

堀 田 耕 介
Kosuke HOTTA

1. はじめに

最初に、筆者は介護福祉分野の専門家ではなく歴史研究・教育に携わる者であり、本稿はその立場から本学において講義を担当する際に設定した問題関心ならびに講義においての実践を述べたものであることをお断りしておきたい。

社会の高齢化が進み、介護を必要としている方の数が増加しつつある現在、介護福祉士をはじめとする介護の技術を持った人々の養成は日本社会にとって重要な課題の一つになっている。

この養成において一義的に重要なのが技術的な面の養成であることは間違いないが、その他にも介護に関係する法律関係の理解、また介護がおかれている社会的な環境の現状の理解など社会的な面の知識・情報の習得も重要であり、また介護に臨む心構え、介護を受ける対象とどのように接するかといった倫理的、あるいは人間的な面もまた重要であるといえる。科学の三分法に即していえば技術面はいわば自然科学的な理解、法や制度あるいは社会環境などの問題は社会科学的理解、心構えなど倫理的・人間的な問題は人文科学的な理解と考えることも可能であろう。介護という仕事が時に人間存在を全的にケアする必要があることを考えると、まさに全人間的な力を動員して取り組むべき仕事であるという言い方もできるかもしれない。

人間を相手にする、特に一人の人間の生活・人生の多くの部分に関わらざるを得ない仕事というものはそういう意味でデリケートな部分を内包している。患者を相手にする医療・看護関係者、幼児の養育を仕事とする保育師・幼稚園教諭、児童・生徒の教育に携わる学校教員などの仕事は、そうした人間的なデリケートな部分のケアを避けて通れない仕事という点で介護職と共通しているといえよう。

そうした仕事の中で介護職の特殊性は、その仕事が多くの場合高齢者を対象としたものであるという点である。多くの場合介護の対象者は介護者よりも年齢が高く、特に短大など学校教育法上の学校を卒業して介護の仕事につく場合は介護者よりもはるかに人生の経験を積

んでいることになる。

こうした高齢者に接する場合、技術上の問題、また介護のおかれた状況の社会科学的な理解も職業人として重要な問題であることはもちろんだが、どういう姿勢で介護対象者に接するかといったいわば心構えの問題がたいへん重要になってくるように思われる。保育や教育など子どもに接するときは対象者に対し最初から大人－子どもの関係が成立していて（最近ではそれも無条件とは行かない傾向が出てきているが）その範囲でいかに接していくかを考えていくことが重要になるが、高齢者を対象としたときはその対し方は大変微妙であろう。

介護者も対象者も大人であることには違いないが、介護者がいわば強者として対象者に接した場合、必ずしも行き届いた介護ができない可能性が予測される。介護に関する技術・知識を身に付けた介護者は、ある意味でそうした振る舞いに及ぶ危険と常に隣り合わせにある、ということは考えてもいいことであろう。

介護の対象が高齢者の場合、高齢者自身にとってみれば介護者は自分よりもはるかに年齢が低く、人生経験の少ない人間であり、そうした人間がどのように振舞うかは常に注視していると考えてよいと思う。そのように考えてみると、高齢者に接する際、心構えという点で最も重要なのは介護者がその対象者の人生に対して尊敬の念を持つこと、言葉を換えていえばその対象者のたどってきた「人生の歴史」を尊重する気持ちを忘れない、ということであると理解されるのである。

現在では介護福祉士の養成機関は多数設置され、多くの介護技術者が輩出され、実際の介護施設で仕事に従事している。その養成機関の多くは専門学校の範疇に属する機関であり、短期大学や大学など学校教育法上の学校の占める割合はそう大きいものではない。また介護の現場での経験3年以上の者が国家試験によって資格を獲得することもできるなど、多くの資格取得の道が規定されている⁽¹⁾。それは現在までは介護技術者の絶対的な不足があり、需要を満たすための促成的な養成が求められていたという点が大きいであろう。しかしこうした機関の教育課程などを参照すると技術的な側面が重視され、特に心構えの面をじっくりと考えるための教科は多くはないように見受けられる⁽²⁾。もちろん経験の中からそうした部分を獲得していくこともあるだろうし、また実際に仕事につく前に考えたことと仕事についてから経験的に理解したこととでは大きな違いがあることもまた事実であろう。しかし、それでもなお実際に仕事につく前に介護対象者に接する心構えについて考える経験を持つことが重要である、ということについてはいえるのではないかと思う。

そしてそういう機会を持つ上では、短大・大学といった一般教養をも重視する教育課程を持った教育機関がその特性を発揮できるということができないのではないかと思う。それは、そうした教育機関が単に技術者ではなく、社会人の養成といった側面も持っているからである。学校時代を終えて社会人として自立する、その最終学校において自分自身の生き方を見

つめ、社会人としての心構えをつくるという作業が、職業人としての心構えをつくる作業と並行して行われることによって、そのどちらもよりしっかりとしたものになれるのではないかと思う。

その点において最も重要なのは「生き方」の問題であり、倫理学などそうした問題に迫る手段はいくつか考えられるであろう。私はその中に歴史学習という手段も加えて考えてみたいと思う。

2. 歴史学習の一般的意義と介護福祉士養成課程における意義

人間はみな歴史の中で生きている。そのことにおいて、すべての人間は平等であるといえよう。歴史の中のある時点で生まれ、ある時点で世を去っていく。そして人間が他の人間、社会との関係の中で生まれ、関係の中でしか生きられない以上、人は歴史と無縁であることは出来ない。歴史とは言っても人がかかわりを持つのは第一にその家族、またその地域の歴史であるだろう。人がどのくらい社会と関わりを持つかによって、その個人の関わりをもつ歴史の大きさは異なってくる。現在では人は国家や世界といった大きな歴史を意識せずに生きることは必ずしも不可能ではないかもしれない。しかしそうしたものが個人の歴史の中に介入してくることを絶対的に排除することは出来ない。特に現在高齢者の範疇に入る人びとは、戦争という極めて大きな歴史と関わった経験をもっている。そういう経験をもつと、なぜこのようなことが起こったのかという疑問を解決するために歴史というものについて考え、調べなければという気持ちを持つのは自然のことだと思う。そしてより大きな世界観、歴史の中に自分を位置付けることによって自分自身の物語、自分自身の歴史に対する認識を再活性化することができるのだろう。戦争などはもちろんない方がよいが、高齢者がなぜ「歴史好き」といわれるかを考えると、現在の社会がなぜこのようになっているのか知りたいという動機をはっきりさせることが歴史を学習する上で重要だということが了解される。

「歴史」という問題に関して重要なことの一つは、個人にせよ国家にせよあるいは学校その他各種の団体にせよ、何かを知り理解することはかなりの部分、「その歴史を知ること」と重なるということである。特に長い年月を生きてきた高齢者にとって、現在のことと同様にあるいはそれ以上に過去の経験も大事なものである。従ってある高齢者のことを知る上で、その高齢者の「生きてきた歴史」を知ることはかなり大きなウェイトを占めると言ってもいい。

あらゆる人間と人間の関係は相手と向き合い、相手のことをよく知ることが大切であることは言うまでもないが、特に人間として通常は触れにくい部分にまで踏み込まざるをえない介護者と被介護者の関係においては強調されるべきであろう。従って両者が大きく年齢が離れている場合はさまざまな手段でその相手のことを理解することがよい関係を結んでいく上でもよい介護を行っていく上でも重要なポイントになると思う。高齢者のさまざまな経験を

聞くことはその高齢者の人生の歴史を理解することにつながる。また高齢者の生きてきた時代背景を理解することで個々の高齢者の人生に対する理解を深め、あるいは歴史好きの方の多い高齢者と歴史を話題にすることによって交流を図ることができるなど、さまざまな形で歴史は介護に関わることができると思う。

そしてそうした話を聞き、その高齢者の人生の歴史を理解することによって、介護者はその高齢者に対する尊敬の念、尊重の念を自然に持つことができるように思う。そうした思いは介護に関わる以上持つべきものであるけれども、それがいわゆる「頭で理解した」ことにとどまらず「心の底からそう思う」ことができるようになるために、歴史学習ならびに高齢者の「生きてきた歴史」を知ろうとする試みは有効ではないかと考えられる。

3. 歴史学習と「身近なお年寄りに話を聞く」課題のねらい

筆者は平成13年より本学において介護福祉学科の歴史学の授業（必修科目、本年は幼児教育学科の学生も選択科目で履修）を担当し、そこで日本近代史を講じるとともに学生に「身近なお年よりに若い時代話を聞く」という課題を出している。講義内容は本稿では割愛するが、歴史を作っているのが人間であるという実感を持ってもらうために政治過程を中心とした内容にしている。

課題について13年度の例を述べると、「身近なお年寄りに若い時代話を聞く」という題で全員に課し、冬休み・実習期間の休み時間等を利用して取り組んでもらった。

この課題の最大のねらい、最大の目標は「お年寄りに話を聞くこと」それ自体である。介護の仕事を目指す人は身近にお年寄りがいる場合が多いようであるが、その場合も深いところまで話をしていることは多くないと思われる。また仕事としての志が先で実際のお年寄りにあまり接していない場合も多いだろう。従って、個人差はあれどどのような学生も「お年寄りという存在と交流すること」が十分に達成されていないのではないかと考えられる。また学生は当然のことながら通常10数年間の記憶しかないわけで、お年よりの生きてきた時代を知らないことはもとより現代という時代を客観的に眺めた機会も少ないと思われる。そして別の問題ではあるが、自分という存在について、あるいは自分のなすべき仕事についても十分に考えた機会がないのではないかと考えられる面が多い。

これらの問題を解決するために、(1) お年寄りに話を聞くことによって「お年よりという存在」に近づき、(2) 若い時代話を聞くことによって現在の自分と比較対照してお年よりの生きてきた時代を理解し、(3) ひるがえって自分自身の生き方考え方を見直す、ということを目指した。

実際には学生に以下のように課題を提示した。

課題：身近なお年寄りに若い時代話を聞いてレポートにまとめる。内容は、印象に残っ

た事件、苦勞したことなど何でもよい。枚数：レポート用紙3枚程度。本文一枚目に必ず(1)話を聞いた年月日(2)話を聞いた人の名前、年齢、自分との関係、(3)話を聞いた場所、の3点を明記すること。注意点：まず話を聞くことが大事。その人の歴史を聞くつもりで、相手のいうことを尊重して聞くこと。レポートの内容は相手の話と自分の感想をなるべく分けて書くこと。

話を聞く対象は「身近なお年より」とした。これは第一に祖父母を想定しているわけだが、お互いに遠慮なく話せ、また心の通いやすい関係の人に話を聞くことが第一のステップとしては適當ではないかと思われるからである。祖父母のいない場合は個別に相談に応じ、親戚、近隣の方、高校までの時代の親しい教員、施設のお年寄りなどの対象を指示し、それでも難しい場合は父母に祖父母の話を聞く、自分の記憶の中の祖父母のことを書く、などの次善の方法を指示した。

話を聞いた人の名前を書かせたのはその人に対する責任を学生に意識させるためだが、事情があって明記が憚られる場合は書かなくてもよいこととした。

レポートは全員の提出を見、一部の例外を除いてほぼ指示どおりに行われたと思われる。

4. 提出された課題の概要

学生数は99、うち男子18名女子81名。話を聞いた対象は祖父32名、祖母49名、その他の親戚4名、父母3名、施設利用者10名、記憶などによって書いた者7名であった。(祖父母双方に聞いた者が5名、親戚の夫婦双方に聞いた者が1名あった。)したがって祖父母・親戚・施設利用者等に聞くなど「お年より」に聞いた者が89名(聞いた対象は延べ95名)、事情により父母や自己の記憶などによって間接的に調べた者が10名であった。

89名中、話を聞いた場所は自宅(実家)が37名、祖父母宅24名、親戚の家2名、電話で聞いた者7名、病室・車中・無記入9名、実習施設10名であった。自宅(実家)で聞いた者のほとんどは祖父母と同居しているものと思われ、そう考えると同居率は現代社会においてはかなりの高率だといえるのではないか。介護の仕事を目指す学生は身近に高齢者がいる者が多いという印象があるが、別に調査してみると興味深い結果が得られるように思われる。

対象の年代別でみると60代3名、70～74歳14名、75～79歳33名、80～84歳28名、85～89歳8名、90代2名、記入なしが7名(合計95名)であった。70代後半と80代前半が合計61名で64.2%を占める。この年代は第2次世界大戦終戦時の1945年には19～28歳の年齢に当たり、出征・戦死・抑留などあらゆる面で最も影響を受けた年代であると考えてよいと思われる。

5. レポート内容の概要

次にレポート内容について概観したい。以下の記述はレポートを元データとしてKJ法を用

いて総合し文章化したものを、さらにまとめ加筆したものである。

(1)お年寄りの話した内容

お年寄りの話した内容は以下の3点に要約される。1. 戦中戦後は困難が多くさまざまな苦勞をし、人生に関わる強烈な記憶がある。2. 昔の社会は因襲の厳しい面もあるが家族や近隣の絆が強く自分たちで何でもやり喜びも苦しみも共にした。3. 現在は昔のさまざまな思い出に対し、振り返る余裕も出てきている。順を追って見ていきたい。

1. 強烈な記憶

1-1. 出征、空襲、疎開、勤勞動員など、戦争に関連した強烈な記憶がある。

戦時中は空襲や疎開、勤勞動員、防空壕での体験などがある。その記憶は逃れられない強烈なものであり、話すのも難しい。戦争中は大変で悲しいことばかりだった。そういった内容が目につく。しかし戦争についての思いは単純なものばかりではない。この経験を伝えたいという強烈な思いを持ち、2冊にわたる自分史を書いている方もあれば辛いことも伝えていくことが大事だと進んで語ってくれた方もある。一方では戦争についてある程度以上聞こうとすると怒って答えてくれなかった、という事例もあった。また「話してもわからないから」と思い息子や娘には戦争の話はしなかったが、今回昔の話を聞かせてといわれてとても嬉しかった」という方もあった。こうした複雑な思いを持っている方は多いと思われる。

空襲は恐ろしかった、ということは多数の方が語っておられた。東京大空襲、千葉・甲府など都市部の空襲を体験した方があり、焼死体があちこちに転がっている凄惨な光景を語られている。農村部でも生々しい体験があり、工場を狙って落とされた爆弾が民家に落ちたという体験もある。空襲を避けるために常に灯火に気をつけ、警報が鳴ればすぐ防空壕に避難できるようにしていた。

疎開について、東京出身だが長野県に疎開し、肩身の狭い思いをされたことを語る方もある。

また軍需工場での労働、勤勞動員、戦闘練習など戦時の風景について語られている方もある。さまざまな場所の軍需工場で働いている。東京では中学や女学校も改造されて軍需工場になり、三交代で夜中まで働いた。疎開で長野県にきて地元の女学校に編入したら授業をやっていて驚いた、という話もあった。陸軍の飛行場であった松本空港で生徒が石拾いをした記憶を語った方もあった。

出征に関してもいろいろな思い出がある。自ら陸海軍に志願した人もあるし召集されて出征した人もある。そのときの「よし、敵をやっつけてやろう」と思いを語っている人もある。スマトラやマレー半島、ビルマやトラック島など南方の戦場に派遣された人もあるし満州な

どに派遣された方もある。宮古島に派遣されて艦砲射撃を受け、穴の中にじっと隠れていた体験を語った方もあった。

戦地では厳しい訓練を受け、殴られたりこき使われたりしたことが語られ、また満州で新兵教育を受けている少年兵たちが兵舎の窓に出る大きな月を見て故郷を思って泣いた、という話もあった。また南方に出征したものの食糧の供給が途絶え、サツマイモのツルや野草、木の実や虫まで食べたという話もある。穴掘りが非常に大きな仕事で、塹壕や医療道具の保管のための穴を掘った。北朝鮮の航空部隊にいてソ連軍の侵攻を受け、危ないところを脱出に成功したという話もあった。通信兵や医療班の仕事についていた話もあった。

僚船が撃沈されたり、ベトナムに行ったものの半分は帰ってこられなかったり、知覧飛行場から300名あまりの特攻隊を見送った、仲間の戦死の悲しい記憶を語る方もあった。

赤紙がこなくて恥ずかったという方もあり、出征に関する思い出は複雑なものだったようである。

1-2. 敗戦後は捕虜や引揚げなど苦勞が多く、改革や混乱で財産やすみかを失う人もあった。

捕虜にされたり大陸からの引揚げで苦勞したり、目標を失って途方にくれたり、敗戦は多くの困難や苦勞をもたらした。改革や混乱によって財産を失ったり、住むところを失う人もあった。

兵士や鉄道員として満州で捕えられシベリアに抑留された経験を持つ方がある。森林伐採、変電所勤務、軍用道路の補修、シベリア鉄道再建の測量などをさせられた。多くの同僚は病気で亡くなった。帰りたい思いと恐怖でいっぱいだったという。抑留は3年から5年の長期にわたった。満州で憲兵として働いていて捕えられた方もあった。スマトラで3年間抑留された方もあった。

満州・朝鮮から引き揚げた経験を持つ方も何人もおられる。攻め込んだソ連軍に撃たれたり、日本人搜索の目を逃れて隠れていた経験も語られている。満州からの引き上げの際は非常に大変な思いをしたことが語られている。朝鮮からの引き揚げの際にあちこちでお金を払わされてわずかしかなかったり、おばを背負って日本に帰った経験を語る方もあった。

一方で、勝つことしか考えていなかったので敗戦で目標を失い、周囲に荒れた人もあった、という人もあれば自分自身気持ちを生活を立て直していくことに向けるのが大変だったと語る方もある。また日本に帰還したら焼け野原になっていて、悲しい思いをしたと言う方もあった。

また戦後の改革と混乱の中で財産を失った経験もある。農地改革や制度の改正で土地を失ったり、蔵が泥棒に焼かれて財産を失ったという話もあった。身寄りを無くして長野県の親戚に身を寄せた方もあり、また戦災孤児たちが物乞いをしている風景も見られた。戦中の生

活の厳しさに比べ、戦後は混乱の様相がより強かったようである。

1-3. 戦中戦後は食糧不足・物不足・医療の不足などさまざまな困難があった。

戦中戦後は食べものに苦勞した。なれない農業をやる人をやる人も多かった。また経済統制によって自由に物が手に入らなかったり、物不足、交通の混乱などさまざまな経済面の混乱があった。また医療も十分とは言えず、運良く助かった話もあるが助からなかった話も語られている。

戦中戦後の記憶で食糧に苦勞した話の数は圧倒的である。とにかく食べるものがなく空腹の辛さは身に沁みるものだったようである。少しでも腹が膨れるようにさまざまな工夫がなされた。お米がなかったのでジャガイモやよもぎ、こうりゃんなどを混ぜて炊いて少しでも量を増やした。笹の実、サツマイモ、豆などを混ぜたり野草を入れたりする例もあり、菜っ葉、大根、麦を混ぜて雑炊にする例もあった⁽³⁾。南瓜や大根、サツマイモ、ジャガイモ、木の葉を食べたという話もあった。また戦後は米軍の援助もあった。終戦後、食べるためになれない農業をはじめた例も多い。開墾し、枯れ木や枯葉を肥料にしたがろくなものができなかったなど、苦勞が語られている。鎌の行商をした話もあった。中には食糧が回ってくる仕事をやっていたので比較的苦勞しなかった、という方もある。戦中戦後は農家でなくても畑を耕し、家畜を飼っていたという例もいくつか語られている。

もう一つ特徴的なのは経済統制についての思い出で、供出や配給、あるいはヤミの思い出が語られている。戦時中は飯米まで強制的に出荷させられ、農家でもほとんど米は食べられず、また鍋や釜まで供出したので非常に困った。配給制がしかれ、食糧や衣類の購入は切符制になっていた。

その他には戦時中の交通に苦勞した話、物を大切にする習慣が抜けないこと、アフガニスタンの子供たちを見て切ない思いをしているという話もあった。

2. 家族や近隣の絆と因襲

2-1. 昔は家族の絆が強く、また自分たちの力で何でもやって、支えながら生きていた。

昔は大家族も多く、家族は仲がよく、出征などで親や夫がいなくても支えあって生きていた、とまとめられる一群がある。昔の家族の生活は、貧しくても家族仲良く、子供を大切にし、心は豊かだった、思いやる気持ちがあったと語る方があり、兄弟が多く大家族で賑やかだったという話もある。戦時中は出征によって男性がいなくなり、女性も竹槍訓練やバケツリレーをし、あるいは老人や子ども、女性が男のやっていた仕事、特に農業に従事した話が多かった。また父、兄、夫が戦死し、自分が家族を支えていく責任を負うことになった、という方も多く、女手一つで何人もの子供を育て上げた経験を語る方も何人もおられた。

多く方は若くから働き、一家を構えてからも家業を起こしたりさまざまな職業について一

生懸命働いて家族の生活を支えた。男性では小学校・青年学校を卒業後、丁稚奉公や製糸工場、あるいは軍の技術本部で働いた経験が語られ、女性は小学校卒業後女工として働いた方が何人もいた。家族のための出稼ぎで、特に当初は仕事を覚えることが大変でとても辛かったという。また看護婦として働いた経験も何人かあった。また語り手の兄が中国で戦病死し、そのときに看病した従軍看護婦の方が法事にて、彼女らが帰国するときに「リュックに入れて帰ってくれ」と語った話などもあった。さまざまな職業につき、あるいは家業を起こし、生活を立てていった話も語られた。

また着るものなどは自分で作っていた。自力で家を立てた人もいる。そうした経験からものを大切にし、自分の家を大切にする気持ちが非常に強い。昔の生活は今と違う面も多いが、大変なことも多い半面楽しく充実した面もあった。女性も男性にまじって力仕事をした話もある。子守りや結婚のために満州や朝鮮に渡り、さびしい思いをしたり夫と死別して悲しい思いをしたりした一方、満州の病院で看護婦をしてとても充実した毎日を送ったという思い出を語った方もあった。

また子どものころの記憶も多くの方が語っている。子どもは自分たちで工夫してよく遊んだ。一方で水汲みや子守り、草刈りなど子供たちにも仕事があり、よく働いたという思い出が語られている。特に水汲みは子供の仕事であり、また重労働であったためかその記憶を語っている方が多かった。子守りをしながら授業を受けたり、子守りをしながら遊んだ記憶も何人も語っておられた。

昔は言葉にあらわすことができないほど苦しいことがたくさんあった、といっておられる方がいる一方でみんなが同じような生活だから苦勞と感じたことはないとか、昔は大変だったけどどこかのんびりしていたという方もあり、受け止め方もさまざまであったようである。このような記憶を共にした夫や父、妻たちをすでに失った人たちはその思い出を懐かしんでいる。亡くなった父親、夫のこと、よくけんかはしたが仲のよかった夫婦関係のことなども語られている。

2-2. 昔の農家の生活は仕来りなどが厳しい面も多いが人間的な付き合いもあり、お祝いなどの席の楽しさもまた格別だった。

昔は多くの人たちが農家で暮らしていたのだが、仕来りもあり、また仕事もきついものであったが、さまざまな行事や近隣との人間的な付き合いもあった。農家では仕事も生活も手作業が多く、田植えや稲刈りなどの農作業から薪取りや炭焼き、炊事や洗濯など生活の仕事の大変さも語られていた。蚕の世話が忙しく、蚕棚の間で寝た話なども語られていた。また嫁が姑に仕える話など仕来りの厳しい面も語られている。一方で風呂をたてたら何軒かがもらい湯をしたという人間的な付き合いが語られたり、どんど焼きなどさまざまな行事が行われたことを懐かしむ方もあった。

農村なので米は食べられた、という方は多かったが、毎日のおかずはほとんどが自家製の野菜の煮物や漬物だったという。自分たちの育てたウサギや鯉がお祝いのときのご馳走に出され、複雑な気持ちもあったがやはりなにもものにもかえがたい美味しさであったと語る方もあった。

3. 振り返る余裕

3-1. 戦争が遠い昔になり、安定した生活の今、昔のことを振り返る余裕もある。

昔は大変だったが現在は安定した生活になり、昔のことを振り返る余裕もある。しかし中には施設での生活の寂しさを訴えたお年よりもあり、安定が必ずしも幸福と等しいわけではない。

3-2. 昔の記憶にはさまざまなものがある。

お年寄りの語る昔の記憶は大変バラエティに富んでいる。スキーを習ったこと、冬がもっと寒く雪がたくさん降ったこと、柿の木を切り倒したらたたりがあったと言う話や、家が教会をやっていてそこでお祭りをしたり物乞いが来たりした話など、さまざまな記憶がある。

(2)学生たちの感想・反応の概要

学生たちの話を聞いた感想・反応は以下の5点に要約される。

1. 昔のことはわかりにくくなったのでお年よりとの対話は貴重なものだがそのためには準備が必要だと思った。2. 今のめぐまれた時代は、苦勞に負けずに立派に働いてきた尊敬すべきお年よりたちによって築き上げられた。3. 昔は現在とは全く違っていて、昔はあったものが失われたり価値観の大きな変化がある。そのためにお年寄りが今の社会や若者に折り合えない部分もある。4. 寂しいお年よりもあれば達観したクールなお年よりもある。5. 多くの人を悲しませる戦争、特に侵略戦争は二度と起きてはいけない。平和な世界にしなければいけない。順を追って見ていきたい。

1. 昔のことはわかりにくい

1-1. 戦争や暮らしの面の大変さは時代が代わってわかりにくくなった。

お年寄りの話を聞き、戦争や暮らしの面など本当に大変であったことを実感をもってとらえられた、という感想が多くあった。その多くは語り手であるお年よりの感情に共感するというもので、当時の事情を理解することの困難をその点で突破して共感に至っているといえる。

具体的に見ていくと、空襲の話に恐怖を感じ、祖父母がそんな目にあっていることに胸が詰まる思いがした、という感想がある。また祖父母にとって、戦争は今でも思い出したくない

重く切ない記憶なのだろうと思った、という感想もある。戦友から年賀状がきているのに戦争の話はしない祖父の胸のうちを想像したり、祖母の涙目から心中を慮っている感想もある。戦争の大変さは分かっていたつもりだったが、話を聞いてみると想像以上に大変だという感想もある。現実の経験者の話はやはり衝撃的であったようである。また身近に戦争や過酷な体験をした人がいることに驚きを感じた、という感想や、生々しい話を聞いて戦争は本当にあったのだなと感じた、という感想もあった。

病気になっても薬がないどうしようもないときの看病の気持ち、満州で訓練を受けている少年兵が故郷を思って泣く気持ち、そうしたものを想像して切なくなる、という感想もある。

また飛行機を整備する仕事をしていてそういう仕事もあったのかという感想があった。戦争に行くときに「よし、敵をやっつけてやろう」と思ったということに驚いている感想を見ると、日本を守るために敵と戦うという気持ち自体がすでに理解しにくいものなのかもしれない。

1-2. お年寄りのとの話は自分にとっても貴重なものだった。準備不足が残念。

お年寄りと話をすることは学生自身にとってもお年寄りにとっても大切な機会であった、という感想があった。お年寄りの人生の話を興味をもって聞くことができたし、いままで聞いたことのない祖父母のいろいろな経験、「母も知らないような昔話」を聞けたという感想もあった。「祖母はどこかであの戦争のときの話を聞かせたいと思っていたんじゃないかと思った」という感想もあり、話をすることで両者にとってよかったという感じを受けている学生もいた。

多くの学生がお年よりの話した内容はとても大事だと考えており、このレポートを大切に取っておきたいという感想もあった。聞いた話を大切にしていだけでなくお年よりの方々それ自体を大事にして行きたいという意見も見られた。今後は戦争体験者が減っていくから、こうした話をこれからもみんなが胸にとどめていけるようにしたいという感想もあった。

話を聞くために必要な準備が十分にととのえられなかったという反省もいくつかある。この時代の知識が不足していて祖父母の話が十分に理解できず、話す側も聞く側も歯痒い思いをしたという感想や、電話で聞いたためにニュアンスが理解できず残念だったという反省もあった。こうした環境をととのえてから話を聞くことは大事なことである。指示を出す側としても反省点として残った。

2. 豊かな時代を築き上げたお年よりたちを尊敬する

2-1. 今のめぐまれた生活は、お年寄りたちが苦勞して築き上げてきたものだった。

自分たちの今ある幸せな暮らしはお年寄りが苦勞して築き上げてきたからこそなのだった、という感想もかなりあった。想像のできないような苦勞の話を聞くと自分たちの不満

がわがままに感じ、自分たちの生活を見直していかなければならないという感想もあった。

2-2. 苦勞によって鍛えられ、困難に負けずに立派な仕事をしてきたお年よりたちを尊敬する。

大変な経験を積んで来た話を聞いて、お年よりの違う面を見て尊敬の念を感じたという学生も多い。祖父母が戦争でいつ死ぬかわからない経験をしていることを聞いて驚き、知らなかった祖父母の側面を知って、「見方が変わった」、人間としての大きさ、尊敬の念を感じたという感想もある。

また苦勞によって鍛えられたお年よりは強い精神力を持ちしっかりしている。祖父母の体験のすごさに「次元の違い」を感じ、自分の「人生の薄さ」を考えさせられたという感想もあった。やはり苦勞している昔の人はそのぶん社会的マナーが身につけているから、子どもがそうした経験ができるような社会環境を整えていかなければいけないという意見もある。子育てにしても、困難な状況に負けず子供を育て上げ、また女手一つで働いた精神力に感嘆した、という感想もあった。

こうしたお年寄りがみな立派な仕事をしてきていることにたいし、自分もそれを誇りに感じ、自分も誇りを持ってしっかりと働きたい、という感想もあった。

3. 失われたものもあるのでは

3-1. 昔の子供も子どもらしく遊びたい気持ちは今と同じだが、家事や家業を手伝ったり、小学校卒業後すぐ働きにでたりして早く大人になることを求められた。

子供時代は遊びたいという気持ちはいまと変わらない。子守りをしながら授業を受けたり、よく働いた話はいまとは全然違う。小学校卒業後すぐ働かなければならないというのは子どもでいられる期間が短く、大変なことだ。という感想があった。

3-2. 昔は今とは全く違い失われたものもある。お年よりは今の社会や若者に折合えない部分もある。

3-2-1. 現代の生活は便利だが昔の生活や生き方には今では失われてしまったよさがあったようだ。

夫婦や家庭、近所との関係はあたたかく絆の深いものであったと思った、とまとめられる一群がある。祖父母のように内面の通じ合う夫婦関係を作りたい。家族や近所で助け合いながら生きているあたたかさを感じた。自分たちの生活も見直したい。といった感想がある。

また、現代の生活は便利だが、人と人との交流、頑張る心、体で技術を覚えること、強い信念など失われたものもあるのではないかとまとめられる一群がある。現代は何でも買えば揃うが、体を動かして技術や知識を身につけることの大切さを忘れてはいけないと思う。昔の地域の行事や交流、習慣や家族の大切さが失われたのは残念だ。戦争の記憶が薄れるこ

となく、力強く語る祖父を見ていて羨ましいという感情を持った。といった感想があった。

3-2-2. 昔と今とは全く違うので、お年よりは今の社会や自分たち今の若者とはうまく折り合えない部分もあるのではないか。

食糧や物の欠乏の話を聞いてその貴重さを感じ、ありがたさのわからない人へのもどかしさも理解できた、とまとめられる一群がある。自力で食糧を調達しなければならなかった戦後は大変な生活で、得られたものは貴重だったと思う。食糧や資源、ものがあることのありがたさを感じ、感謝して大切にしなければいけないと思った。といった感想があった。

また昔の生活は便利な今の生活とはかけ離れていて、お年寄りにはなじみにくい面もある、とまとめられる一群がある。昔に比べるといまの日本は便利で衛生的で何でも手に入る恵まれた生活環境である。祖母は自動販売機という名称も知らなかった。という感想がある。祖父母と学生の間認識のずれを感じている。また祖父母は働き者で、仕事以外にやることを見つけないのが苦手であるという感想もある。お年寄りが仕事の減った時間の過ごし方に苦労している面も学生は見ている。

しかしそれらの齟齬に関して、厳しい時代を生きた祖父たちの考えにはなじめない部分もあるが、理解し尊重していかなければならない、とまとめられる一群がある。お年寄りに対するときはその立場や気持ち、人生経験を理解し尊重する姿勢が介護の仕事につく上でも大切だと思った。厳しい時代を生きた祖父たちは学生たちにも厳しく、それに対する反発はかなりあるようだが、そうした考えが理解できなくても祖父がそう考えるということは尊重していきたい、という感想もあった。

4. 人によりさまざま

自分たちの人生は平凡だった、という話をするお年よりは多く、また年寄りが死ぬのも親が死ぬのも当たり前、という人生観に人生とはそんなものかと思った、という感想があった。一方では施設に入っている人はさびしい人もいて、馴染みのある注連縄作りの作業などをレクリエーションに取り入れお年よりの役に立ちたいという感想もあった。

5. 平和な世界に

多くの人を悲しませる戦争は二度と起きてはいけない。平和な世界にしなければならない、といった感想もあった。お年よりの話を聞いて改めてそのことに対する思いを持ったようである。

6. 総括と今後の課題

学生がお年寄りに聞いた話の内容は実にバラエティに富んでおり、読んでいて時に感動に

震え、時に背筋の伸びる思いにさせられるものであった。また学生の感想もこうした話をはじめて聞いたこと、話を聞いて祖父母に尊敬の気持ちを持ったこと、またふだん祖父母の厳しい態度に反発を感じていたのが理解を示せるようになったことなどを書いており、せっかくめぐまれた境遇にいるのだからそれを大切にして意義のある生き方、生活をしたいという意識が感じられた。

筆者自身、学生のレポートを読んで非常に勉強になり、啓発されることが多かった。筆者自身が物心がついたときにはすでに高度経済成長時代に入っている。従って学生に比べて多少は「昔」のことが分かるとはいえ、戦中戦後が「歴史」の範疇に属することにおいて学生と変わりはない。その意味で、歴史を研究するものとしてたいへん勉強になった。

こうした内容は経験者にとってはきわめて当然のことで、またすでにいろいろな形で語られていることが多いのは確かだろう。しかし、学生がお年よりの話を聞くことによってこれだけの認識に達したとしたら、この試みの自己教育的な効果はかなりあるといえるのではないか。戦中戦後を語った書籍が多く出版されていても実際に近づく学生は少なく、また通り一遍以上の認識を持つことは現実問題として難しいと思う。その点はこの試みの教育効果として評価できるものと思う。

今後の課題もある。5. に述べた内容は学生全員のレポートをまとめたものであり個人の聞きとりでこうした全体的な網羅した理解に達することは難しいと思われる。従ってこの全体像を学生にフィードバックし、学生全体の認識として共有して、さらに認識を深めることが重要になる。全体を説明し、内容について自分はこういうことも思った、ここは気がつかなかったがこういうことだと思った等の意見が引き出せれば、それによって学生たちのお年よりのコミュニケーションの必要性に対する自覚、自分がこれからつこうとしている仕事の意義の再発見に役立つのではないかと考える。昨年度は講義と課題実行期間の設定の問題で十分フィードバックすることはできなかったが、今年度以降はそれも実施しその結果もまとめてみたい。

いずれにしても介護福祉士養成課程にできる限り歴史学習やコミュニケーション面での実践を取り入れていくことは有効であり、介護の質を向上していく上でも必要なことであるといえると思う。最初に述べたことに戻るけれども、人間を、しかも長い人生経験を積んだお年寄りを対象にする介護という仕事のデリケートな部分に対する理解を深めるためには、人間は歴史の中に生きている存在であるということを自覚することは重要なことであると思われるのである。

- (1)資格制度については一番ヶ瀬康子監修・日本介護福祉学会設立準備委員会編：介護福祉学とは何か．ミネルヴァ書房．京都市：p.162. 1993および財団法人社会福祉振興・試験センターウェブサイト「資格制度の概要」<http://www.sssc.or.jp/shiken/kaigo/k01.html>（2002/12/25現在）を参照。
- (2) 2年制養成施設のエ育課程は社会福祉士介護福祉士学校職業能力開発校等養成施設指定規則（昭和62年12月15日厚生省令50号）別表第4（平成11年厚生省令第89号による改正）によって教育内容のうち基礎分野として「人間とその生活の理解」120時間が定められており、備考に「専門分野の基礎となる内容について教授すること 人権の尊重に関することを含むこと」となっている。各校はその規定に従って人文・社会・自然系あるいは独自の教科を開講している。日本介護福祉士養成施設協会ウェブサイト<http://www.kaiyokyo.net/> からリンクされている関東甲信越の2年制専門学校のうち教育課程をウェブ上に公開しているものが30校あり、うち「人間とその生活の理解」に該当する教科として倫理学を開講しているものが8校、哲学5校、キリスト教関係4校、国語系科目が9校あったが歴史学を開講しているのは1校のみであった。
- (3)静岡県：復刻 昭和二十年八月 食生活指針．農山漁村文化協会．東京： pp.70-103. 2002.には米に炊き込める野草としてあかざ、ふきの葉、どくだみの根茎などがあげられ、その他食用になる野草としてあざみ、せり、たんぽぽ、おおばこ、つゆくさ等多数あげられている。長野県でも同様の野草を食用にしたものと想像される。